

バックアウト・ムービーズ

私をKOで打ちのめした映画



著者: Lucky Day
当コラムニスト
映画作家、元プロボクサー

Round 9

『素晴らしき哉、人生！』 (It's a Wonderful Life 1946)

「人は誰もが重要人物。ひとりの人間が数多くの人にとって、かけがえがないんだ。ひとり抜けただけでも、それはそれは、大きな穴があくことになる。… クリスマスの定番、映画史上でトップ10に入る『素晴らしき哉、人生！』(It's a Wonderful Life 1946) からのセリフ。

第二次大戦で約8千万人(うち約70%は民間人)の命が奪われた直後の作品。日々、事故や病気で人が亡くなるのを耳にする度に家族、友人で約10-30人が膨大な悲しみに直面することを考える。知人たちを併せて100人くらいがともつらい思いを。8千万人の死は80億人の悲しみ。1945年当時の総人口、25億人をゆうに超え、地球は大きな穴だらけだった。

6才の時に貧困のシチリアからアメリカに渡ったフランク・キャブラ監督による同作品は、2時間10分におよぶ漫才のような軽妙さ。注目すべきは、画面の背景にいるエキストラも含め一目見ると登場人物のキャラクターがわかる点で、それはジョン・フォードや黒澤明作品に通じる。いくらクローズアップで自分の気持ちを事細かに説明しても、まったく人間が見えない大河ドラマとは対極にある。どうして



© RKO Radio Pictures

キャブラやフォード、また『素晴らしき哉、人生！』を製作した2人の同志ウィリアム・ワイラーやジョージ・ステューブス監督には、それができる?それは彼ら全員が「死を見た」から。4人共々、戦場で記録映画を撮った。

フォードは機銃掃射を浴びながら駆逐艦上でカメラを回し続けた。ワイラーの同僚カメランは撃墜され、自身は機上で酸欠のため失神。キャブラは残忍極まる中国戦線等を撮影し、ステューブスによるダハウ強制収容所等の強烈な映像はナチス戦犯を裁くニュールンベルグ裁判でも流された。私がダハウ収容所を訪れた時、遺体は無くとも戦慄した。彼は溢れる死体や震える生存者の真っ只中ですべてを撮った。死を直視した監督たちは一氣に変わった。

ステューブスは、その後『生きるための命』『陽のあたる場所』『シェン』『アンネの日記』、黒澤明は『わが青春に悔なし』『素晴らしき日曜日』『生きる』『生きものの記録』…題名にも『生きる意味』が込められ始めた。嵐を体験してはじめて太陽のありがたさがわかる。

帰還兵と家族の苦悩を描く『我等の生涯の最良の年』(The Best Years of Our Lives 1946)でワイラー監督は両手を無くしたカナダ出身のハロルド・ラッセル他、戦

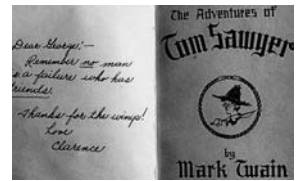
争体験者たちを多数起用。彼らに演技指導をさせようとする無能な会社側を無視し、元兵士ハロルドにアカデミー賞をもたらした。演技はおべべの着せ替えじゃない。人間の面が出るもの。役者や監督、作曲家のみならず、私たちは皆、中身なしでは何も出ない。

『素晴らしき哉、人生！』に話を戻そう。キャブラが観客に語りかける…「(どんな災難があろうと)人生は素晴らしい。途中で投げ出すのは大間違い」と落ち込んでる人たちに。商売人・公務員たちに真に人のために尽くしてる?勉強しなさい!」がログセのガミガミ教育ママたちに「人生の問題を解ける強く優しい子」は?「将来、安定した生活(=お金がたくさんある生活)が第一目標のようだが、それが「本当の幸せ」?

映画のクライマックスでは『トム・ソーヤーの冒険』の本の扉裏に天使が「友を持つことこそが人生の宝 No man is a failure who has friends.」と書き残す。著者マーク・トウェインの言葉「人生には2度重要な日がある。ひとつは生まれた日。もうひとつは生まれた理由を見出した日」を思い起こした。ひとつ目は、誕生日だから簡単だが、ふたつ目を理解する人は少ない。理由を見出してはいた、ダラダラと同じことはできないから。目はキラキラ輝いているはずだから。開眼すべきは監督以上に観客。見る目を持たずに何も見えない。

「人は誰もが重要人物。生きる意味を悟った人生は、かけがえがない」

(Lucky Day)



▲「友を持つことこそが人生の宝」と天使からのメッセージ

Round 10

『真昼の決闘』

(High Noon 1952、フレッド・ジンネマン監督)

百人以上は住んでる町に4人の悪漢がやって来る。みんなで協力すればなんともないが、どいつもこいつも甲羅(こうら)に閉じこもった亀だから、悪党は好き放題。自分勝手な連中が集まると、悪が権力を握る。

結婚式を挙げたばかりの保安官は、たったひとり闘う。弾丸を浴び、花嫁まで人質に取られる目に遭いながら、ついに悪を退治。危険が去ったあとに町中から小亀たちがゴキブリホイホイみたいゾロゾロ這い出て来る。数分前まではゴーストタウンのようだったのに、こんなに大勢がただ傍観していた。非正義は、白日の真昼間(ハイヌーン)に堂々と行われる。彼らを見回す傷ついた保安官。「自分勝手な連中は守る価値もない」失望した保安官の目。無表情に星のバッジを外し、ポトンと地面に落とし、静かに町を去る。「町の腐敗は、町民の腐敗」「町を救う気は毛頭ない。ただ糞食うだけ」悪党・悪政に相当する非正義は市民にある。悪は一部の少数派ではなく、大多数を占める。

「これは、世界の真実だ」ポーランドに生まれ、オーストリアに育ち、パリで学び、メキシコで働き、ハリウッドに移り住んだフレッド・ジンネマンが映画化を決意。西部劇の形はとって現代の民衆腐敗を見せるため、カメラのフィルターを外して西部劇の埃っぽさを取り払った。ジンネマンの両親がユダヤ人強制収容所で殺されてから6年後のプロジェクト。ナチスの暴虐は市民の支持を得た結果。肉親の不条理な死は人を絶望の深淵に落とし入れ、同時に世界を見抜く力をもたらす。ジョン・ウェイン(ベトナム戦争大賛成)、チャールトン・ヘストン(全米ライフル協会会長)らは、社会派の同作品への出演を蹴った。非米活動委員会(=赤狩り)反対派のインテリ、グレゴリー・ペックは出演しなかったことを最大の後悔とのちに話した。

『真昼の決闘』でゲーリー・クーパーが足元に落とした正義のバッジは、19年後の『ダーティハリー』(1971)では、クリント・イーストウッドにより工事現場にできた道の遠くに投げ捨てられた。



村人は、ボディガードとして『七人の侍』(1953)を無賃金で雇っておきながら、はるばる侍たちが到着してもタニシのように隠れて知らんぷり。出迎えないしなれば、あいさつもなし。静まり返る村。それが山賊の野武士たちが来たとの合図の途端に村中が家々から飛び出し「お侍さま!お侍さま!お助けください!」と血相を変えて、必死に助けを請うシーンで黒澤明は現代市民のズルさを暴いた。

人また人でごった返す新宿駅で白い杖の目の不自由な方々や車椅子は無視されるどころか邪魔者扱い。「どなたか助けてください!お願いします!」と懇願する女性の声と、壁にぶつかる杖の音がこだまする六本木一丁目の地下鉄駅。「誰もいないんだな」と急いで階段を駆け下りると、階段協会で戸惑う目の女性に気づかれないようにソートと避けて通るOLやサラリーマンたちがプラットフォームにいわばい。どっち側の電車に乗ればいいかを知りたいだけの女性を無視して。

電車内では、お年寄り、お腹の大きい子連れのお母さんが立っている時に限って全員タヌキ寝だ。スーパーの駐車場では、障害者用のスペースが一番にヤングママや役所の職員により占拠される。スピード違反取締り中の東京中野区の警官の一人が路上禁煙地区で喫煙 & ポイ捨て。これらの状況に対処して、白目目で睨まれたり、おまわりに文句言われた経験は数知れない。世の中には2種類の人間がいる。「何もしない人間」と「ジャマをする人間」。ヒッチコックの恐怖映画よりもずっと恐い。「もうごめんだ」って無言で去ったクーバーもイーストウッドも2度と立てないKO負けだろう。市民やハリウッド内でも体制側の連中はジンネマン監督やアカデミー賞4部門受賞の同作品に嫌がらせや酷評を浴びせたが、それが彼らの浅はかさを露呈。反体制作品でもちゃんとオスカーを獲るところに、まだアメリカの正義がある。石頭とアーティストが同居している象徴。

悲しくも『真昼の決闘』でデビューしたリー・ヴァン・クリーフは64才で、クーバーは60才でガンでさようなら。2人も190センチの健康優良児だったのに。数多の原爆・水爆実験が行われたネバダ周辺で西部劇を撮った、それはそれは多くの俳優、スタッフがガンにかかった。人間性無視の社会は、バッジを捨てようが無差別に人を襲う。列車の到着を待つ『真昼の決闘』のオープニングは、のちにセルジオ・レオーネが『ウエスタン』でコリに凝った作りに変え、(現実とは、かけ離れていても)反対に理想となる「立ち向かう市民」を描いたのが『ストリート・オブ・ファイアー』や『ミンボーの女』のクライマックス。8つのオスカーに輝く「地上より永遠に」、弾圧に屈しない



▲フレッド・ジンネマンとオードリー

トーマス・モアを描きつつ赤狩りに対抗した『わが命つきるとも』、F・フォーサイス原作の『ジャッカルの日』等、傑作だらけの作品群は世界の苦しみを知るジンネマンならではの。オードリー・ヘップバーンの主演作でもっと知られてない一本がジンネマンによる『尼僧物語』(1959)。同年に撮られた『アンネの日記』への出演を断ったオードリーの決意が溢れ、彼女の最高の演技が見られる。オードリーとアンネ・フランクは同じ1929年生まれで誕生日は、わずか1ヶ月の違い。2人は同時期にアムステルダムに暮らしていた。アンネの隠れ家には私は50回くらい行った。想像にすぎないが、ナチスに睨まれないようにと「エッダ」とオランダ風名前を変えたオードリーにとってアンネを演じるのは「きつ過ぎた」気がする。アンネの家は、訪れるだけでもきつ。また様々な役に挑むべき役者として「身近すぎ」もした。チャレンジなくして人生じゃない。そこへ重厚なジンネマン監督から届いた修道女の役柄では、静かながらもオードリーの信念の炸裂がある。実話に基づく原作は彼女の友人キャサリン・ヒュームによる。ナチスの侵略が続く中でも「伝統」「しきたり」を都合良き理由にして、黙認あるいは妥協に過ぎない「日々、同じこと」を繰り返すみの修道院。ついに父親を殺された時、オードリー演じる修道女は自分の心の声を信じ、規律の象徴である修道着を脱ぎ、裏口からひとり去って行く。人間に還るために。

設定の違いから、気づいた観客は少ないと思うが、このオードリーの入魂のシーンと、バッジを捨てたクーバー、両親を殺されたジンネマンのファシズムとの闘いとが重なる。「正義は常に孤独」つまり悪は群れる。「因習よりも善意」を信じてこそしか世界は変わらない。自分勝手な市民には期待できないどころか、彼らこそが悪徳社会の幹部。「悪徳政治家どもが世界を滅ぼすんじゃない。それに対して何もしない人間たちが滅ぼすんじゃない」—アインシュタイン。

(Lucky Day)